



我孫子通信

文人の郷だより

令和3年春号

通信第三



辻説法 館長のつぶやき



第5回 柳の石油ストーブ、杉村の暖炉

▶志賀直哉の小説「雪の日」は、副題の「我孫子日記」が示す通り、大正9（1920）年2月8日の出来事を記した小説である。我孫子の雪が見たいというK君とともに我孫子の町で買い物をした帰りに、志賀と同じく我孫子に住んでいた白樺同人で宗教哲学者柳宗悦のもとを訪れる。柳は大正3（1914）年、叔父の嘉納治五郎の別荘の隣に住まいを設けていた。三樹荘と呼ばれた住まいには、妻で声楽家の柳兼子と子どもたちとともに暮らす母屋の他に、「竹林軒」と名付けた離れの書斎があった。「雪の日」では、「柳は離れの書斎を石油ストーヴで温かくして勉強していた」とある。また、一度家に帰って出直した志賀が再び書斎に来ると、「薄暗い中に石油ストーヴの火が雲母を通してその向いた方だけを赤々と照らしていた。」という。

▶ここで注目したのは「石油ストーヴ」だ。「雲母を通して」ということは、燃焼監視の耐熱ガラスをはめ込んだ「対流式石油ストーブ」であろう。

▶石油ストーブの歴史は灯油の歴史とともにあるとってよい。灯油は文字通り照明用の石油ランプに用いられた。明治時代は輸入灯油が主で、アメリカ産とロシア産！が拮抗していたという。大正時代になって灯油の国産化が進むが、その頃になるとガスや電気が普及し始め、家庭での使用は照明用から調理用、暖房用に替わって行く。ただし、一般家庭に石油ストーブが使用されるようになったのは太平洋戦争が終わって、配給統制が解除された1950年代以降である（小嶋正稔1996「我が国における灯油の流通構造」）。石油ストーブについて新聞検索（朝日新聞「聞蔵Ⅱ」）すると、『東京朝日新聞』明治32（1899）年11月17日に「久野木式石油^{ストーブ}厨爐」の宣伝が現れたのを皮切りに、たびたびイラスト入り広告が掲載されるが、これは漢字表記の通り上に鍋釜を乗せる調理用のものである。志賀が使用した対流式で耐熱ガラスをはめ込まれたものは「舶来品」の広告に現れる。『東京朝日新聞』大正12（1923）年12月18日に「重寶^{ちようぼう}がられる石油ストーブ」の見出しで「一日増しに寒さは強くなる一方薪炭は需要増加で値は上り品は益^{ますます}不足するバラック住まひの人など今年如何^{いかに}して嚴寒^{ごっかん}を凌ぐかは由々しい問題で可成頭^{かなり}を痛めてあるが（中略）此頃石油燃料のストーブや又ストーブ代用として石油の焜爐^{コンロ}が非常に歓迎され却々の賣れゆきださうだ石油ストーブは昨年あたり見本として輸入されたスタンダード社製のものが今年非常に荷が這入つた（後略）」と、大正12年9月1日の関東大震災による物不足がきっかけになって、アメリカ製の石油ストーブが流行りだしていることがうかがえる。

裏面へ続く…

いずれにしても、大正9年に、おそらく舶来品の石油ストーブを個人宅で、それも我孫子で使っているのは大変珍しい存在であったと言える。

Date

▶さて、大正13（1924）年に我孫子に移住したジャーナリスト 杉村楚人冠はどのような暖房を使用していたのだろうか。杉村家の支出帳によると、大正15年に清水組（現在の清水建設）に頼んで717円払って暖炉を設置している。公務員の初任給が75円程度というからなかなか良い金額である。杉村は暖炉を「フッヤプレース」（ファイアプレース）もしくは「壁炉」と呼んで愛していたらしく、たびたび自身のエッセイ集『湖畔吟』『続湖畔吟』『続々湖畔吟』で取り上げている。暖炉の前で、原稿を書き、読書をし、午睡をし、物思いにふける。時には古い手紙も焼いてしまったらしい（残念!）。友人の内藤游博士の発明した石炭ストーブも導入しているが（我孫子市教育委員会2019『杉村楚人冠 続湖畔吟 現代表記 注解付』）、暖炉前がお気に入りだったようだ。杉村はロンドン特派員として赴任していたこともあって、かの地の紳士の暮らしを我孫子で再現したいという思いもあったのだろう。

▶思えば、柳や志賀は、喧噪としがらみに溢れた東京を離れ、田舎の我孫子で暮らすにあたって、洋食(カレー)やパン、ピアノや蓄音機、そして石油ストーブといった最先端の東京の暮らしを持ち込んだ。静謐な我孫子という環境を得て、彼らの感覚は研ぎ澄まされ、民藝運動や夥しい小説に繋がっていく。だが、持ち運びのできる石油ストーブのように、彼らがより心地よい場所、インスピレーションを与えてくれる場所を求めて動いていくのもまた定めであった。



▶一方、杉村は、喧噪に溢れた東京で仕事をして我孫子に帰って来る。杉村の言葉を借りれば我孫子は「安息の地」であった。誤解なきよう申し添えれば、杉村もゴルフ、ヨット、自転車という新しい物を積極的に受け入れたのだが、我孫子という「暖炉」の前から動くことなく、昭和20年に亡くなるまでここで暮らし続けた。



▶石油ストーブと暖炉、柳と杉村の思考や生き方を考える上で何か示唆的だと思うのだ。

(辻史郎)

写真上
楚人冠が暖炉でくつろいでいる様子(昭和9年頃)
写真下
現在の杉村楚人冠記念館のサロンの様子
右側に暖炉が見える

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（=辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●春！今年はお花見ができない代わりに、桜並木をゆっくり散歩したり、家にお花を飾ってみたりと、部屋の中が色づくとも、日常の空間が新しい景色になり、小さな変化に胸を弾ませています。こんな時期だからこそ、トキメキが大切だと思う今日この頃です。●そのようななかで、新たな楽しみが見つかりました！4月10日（土）夜9時からBSプレミアムで「流行感冒」が放送されます！我孫子で書かれた作品なので、どのような設定になっているのか楽しみです（K）

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



白樺派と言えは新し物好きだと思ふ。それは最新の流行に敏感だということもあるだろうが、明治十年代以降の生まれらしい感性の新しさを感ずる。武者小路実篤は文字通り「新しき村」を展開し、柳宗悦も「民藝」を見出していく。明治日本に生まれた人間として、西洋、東洋問わず知識を柔軟に取り入れられたから出来たのだろう。また白樺派全体の功績として、後期印象派の紹介がある。ロダン、セザンヌ、ゴッホ、ルノアールなど、今日我々がこぞって見に行く作家、作品たちを評したのは、白樺派であった。弊館は開館二十年であり、コレクションの中でも人気の作品を展示している。その一つが「鼻のつぶれた男」である。ロダン初期の作品であり、あまりのリアルさに型を取って作ったのではないかという逸話がある。人間の評価は、本当に難しい。志賀直哉は次のように語る。

「偉れた人間の仕事—する事、いふ事、書く事、何でもいいが、実に愉快なものだ。【中略】芸術上で内容とかいふ事がよく論ぜられるが、その響いて来るものはそんな悠長なものではない。そんなものを超絶したものだ。自分はリズムだと思ふ。」（「リズム」(一九三二)）

志賀はリズムを感じさせないものに、いくらうまく出来ていてもくだらないと言う。それを受けて思うのは、白樺派、民藝の精神は「温故知新」なことだ。受け継がれてきた古きモノのリズムを理解し、その中に新たなリズムを見出していくという営みが彼らにはあったのだろう。

通信寄稿も三回目。コロナ禍の一年は、全てのことが停滞し、新しい生活と言われても後ろ向きな「待ち」の姿勢が随分と続いたような心地だった。しかし彼らの残した作品、文章からまた新たなリズムを見出し、私自身もまた再出発したいと思う。そのために毎週ジム通いと白樺日より（ブログ）を再開させようと思う。新たなリズム。年パス購入者へ、そして主任学芸員への決意表明である。白樺九年目の春を迎えた楽藝人より。（稲村隆）



コラム「我孫子から」について

志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

杉村楚人冠は調査部をはじめ新聞の世界で「新しい！」ことを……つて、この書き出しでは昨年の特別創刊号の「初めのこと」と同じになってしまおう！……というわけで、今回は切り口を変えてやりますが、少し硬い話になります。しかし、楚人冠の仕事を語るうえで大切なことですので、何卒お付き合いの程をお願い申し上げます。

「新しい」を英語にすれば 'new'、これが名詞になって複数形になれば 'news'、「ニュース」を載せるのが新聞と、新聞記者たる杉村楚人冠の守備範囲に入ってきます。ところが、楚人冠の『新聞の話』によると、なぜ形容詞である 'new' から名詞の 'news' という言葉が生まれたのかは諸説あつて分からないのだそうです。さらに、何をもちて 'news' とするのかがまた難しい。これが新聞記者として楚人冠が向き合った課題です。

'new' = 「新しい」から派生した言葉なのだから、新聞が報じる「新しい事実」が「ニュース」と考えるのが一番シンプルなのですが、楚人冠に言わせれば、新聞が「新しい事実」のみを報じていたのでは各紙の個性がなくなってしまうため、様々な方法で「新しい事実」とも意見とも違う「ニュース」を掲載するようになってきた、という歴史があります。では、「新しい事実」に限定されない「ニュース」の定義、新聞に掲載するべき「ニュース」とは何なのか？『新聞の話』では十三もの説を紹介し、「未だ曾てこれならばと満足されたものはない」と楚人冠は評します。ごくごく身近な「ニュース」という言葉ですが、実は、何が「ニュース」なのか、という説明は難しいんですね。

様々な説明を挙げた楚人冠は、大体の一致点として「ニュース」は「読者にインテレストを与ふるもの」とします。一般的には「興味」と訳されますが、もつと広く「心を動かすこと」がインテレストだといえます。そのインテレストの大小を基準として「新聞価値」を考へるのが、当時の世界の新聞界の趨勢であり、楚人冠が『新聞の話』の読者に伝えようとした考え方でした。「新聞価値」を基準にして見ると、日々のニュースも違って見えるかもしれません。（高木大祐）



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
3月9日～5月9日 「楚人冠の旅」展			●6月12日楚人冠講座			5月15日～7月11日 「楚人冠の本棚」展			7月13日～10月10日 「弱者へのまなざし」展		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
3月3日～6月27日 「旧白樺文学館コレクション」展			6月29日～8月2日 空調工事により休館			8月3日～11月14日 「山田家コレクション」展			11月17日～2月27日 「山田百合子と原田京平」展		
「白樺派と我孫子2021」展											
白樺文学館											

■白樺文学館

令和3年3月3日（水）～11月14日（日）

常設テーマ「白樺派と我孫子2021」前期

白樺文学館所蔵の白樺派の人々（柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤）の作品、原稿、書簡などを展示します。

前期：旧白樺文学館コレクションを中心に6月27日（日）まで

後期：山田家コレクションを中心に8月3日（水）～11月14日（日）まで

令和3年11月17日（水）～令和4年2月27日（日）

企画展「山田百合子と原田京平—我孫子への物語—」

志賀直哉の姻族山田家。志賀直哉と同世代の山田百合子と原田京平には共通点があります。歌人であったということ。実はその2人をつなぐ雑誌が今回発見されました。その雑誌は『^{しらがし}白櫛』。我孫子でつながった物語をご紹介します。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費：無料（入館料のみ）

開館日は毎日市民スタッフによる BGM 演奏を開催しています。11時～か 13時～どちらか 1 時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は 35 名。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。

お知らせ

①「我孫子の風景を読む—志賀直哉たちが見た我孫子の景観—」※日程調整中 秋に開催予定

講師 小山泰弘氏（長野県林業総合センター林業専門技術員 農学博士）

②6月29日～8月2日まで空調工事により臨時休館を予定しています。詳細決定次第、ホームページなどでお知らせいたします。



■杉村楚人冠記念館

令和3年3月9日（火）～5月9日（日）

企画展 「観光案内と地図で見る楚人冠の旅 ～欧米編」

平成31年度に開催してご好評をいただいた「観光案内と地図で見る楚人冠の旅」、今回は「欧米編」です。1907年ロンドン、1908年朝日世界一周会、1914～15年第一次世界大戦、1921年ハワイ世界新聞大会と、杉村楚人冠が海外に特派された際に蒐集した観光案内や地図に、一部関連資料を加えて、楚人冠の海外への旅の様子をうかがいます。思いがけず海外旅行が困難になったご時勢、100年前にタイムスリップしての空想旅行はいかがでしょうか。

令和3年5月15日（土）～7月11日（日）

テーマ展示「楚人冠の本棚 楚人冠のジャーナリズム文庫」

今回のテーマ展示は久しぶりの「楚人冠の本棚」シリーズです。今回は、個人のコレクションとしては非常にユニークな、新聞・ジャーナリズム関係の書籍コレクション、楚人冠が蒐集していた「ジャーナリズム文庫」をご紹介します。楚人冠のジャーナリズムに関する深い知識を支えた、欧米のジャーナリズム史についての書籍や、東京朝日新聞の多士済々の同僚たちの著作などを展示します。

7月13日（火）～10月10日（日）

企画展「弱者へのまなざし —幸徳秋水・堺利彦・杉村楚人冠の交流—」

大逆事件で社会主義を恐れる権力に命を奪われた幸徳秋水、秋水亡き後の社会主義者たちを支えた堺利彦、そして彼らの理解者であり、利彦が亡くなるまで折に触れて支援を惜しかなかった楚人冠。弱者に向けるまなざしを背景に、彼らの交流を描きます。幸徳の無実を伝えるため獄中から管野須賀子が出した針文字書簡、判決の日の新聞社の様子を回想する石川啄木の書簡、幸徳を監視する警察の様子を、楚人冠の記事をモチーフにして取り入れた場面がある「それから」を刊行したときの夏目漱石の書簡、貴重な資料を出し惜しみなく一気に展示します。

第9回楚人冠講座 6月12日（土）生涯学習センターアビスタ第二学習室

「杉村楚人冠の人と作品2」

定員 20人（要予約 [5月16日9時30分受付開始]・先着順）

予約受付 市民図書館アビスタ本館（電話：04-7184-1110）

年間パスポート先行予約 5月1日～15日 杉村楚人冠記念館（電話：04-7187-1131）

※先行予約期間終了後は、図書館での一般受付のみとなります。

今回の楚人冠講座では、杉村楚人冠がジャーナリストとしてどのような経歴をたどっていったのかわかるように、東京朝日新聞入社以降の作品から、楚人冠の仕事ぶりを象徴するようなものを選び、古い物から順に読んで行きます。これで楚人冠が近代ジャーナリズムの確立に果たした功績がわかります。

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。





我孫子通信

文人の郷だより

令和3年夏号

通信第四



辻説法

館長のつぶやき



第6回 自転車のこと～志賀直哉と杉村楚人冠

▶志賀直哉の自転車好きは、志賀の小説「自転車」(昭和26年)で知られている。志賀の愛車は「デイトン」といふ^{えび}蝦茶がかかった赤い塗りのもの」で、学習院中等科に進んだ明治28(1895)年に祖父の志賀直道にせがんで買ってもらったという。ペダルが動かないようにロックしたまま急坂を降ったというから、ブレーキが無く、車輪を逆回転させて停める、今で言うところのピストバイク(シングルスピード)であろう。ギアが固定式で空転しないため、常に脚を回し続ける必要があるが、友人宅はもとより江ノ島、千葉まで日帰りで遠乗りをしたという。志賀の麻布三河台の自宅から江ノ島までは片道およそ50キロ、往復100キロ、現在のように舗装された道ではなかったから、かなりの脚力が要求されたと思う(筆者も中学校時代に東京世田谷から江ノ島までママチャリで往復したことがあるが、かなり大変だったなあ)。

▶志賀が祖父に買ってもらった愛車デイトン(アメリカ製)は160円也(東京朝日新聞の明治30年の広告では一台150円)。志賀自身が「十円あれば一人一ヶ月の生活費になった時代の話」と述懐するように、その値段の高さが分かるだろう。明治30年の巡査の初任給が9円ということなので、現在なら350万円くらい?中学生が外車を乗りまわすのは、「巨人の星」の花形満の専売特許ではないのだ!

▶志賀は遠乗りだけでなく、道路で行き会った自転車に競走を挑んだり、ギアを交換して曲乗り(今でいえばフリースタイル)に熱中していたようだ。こういった若者は大勢いたようで、自転車愛好者の倶楽部が数多くつくられた。彼らは志賀のように遠乗りをする、不忍池の周りで競走をするなどしていたが、明治33(1900)年の東京朝日新聞には、自転車競走が引き起こす事故や喧嘩が多発していることから、警視庁が取り締まりを強化する方針である、と伝えている。

▶志賀は3、4年経って愛車デイトンに替えて、「神田橋の方」の自転車店のショーウィンドウに飾ってあった「ランブラー」を衝動買い!した。明治32(1899)年の東京朝日新聞の広告では神田橋外の「濱田自



『東京朝日新聞』
明治30年11月16日号

転車店」がラムブラーの「特約」「一手販売」を行っている、とされていることから、志賀が新しい愛車を購入したのは濱田自転車店である可能性が高い。「横と斜のフレームは黒、縦は朱に塗った、見た眼に美しい車だった」

そうだから、志賀は最先端のトレンドを文字通り疾走していたのだ。

▶『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』には二台の自転車に器用にまたがる若き日の志賀と、昭和26年に後ろ向きに曲乗りする志賀の写真が掲載されている。ただ、十代で自転車を十分味わい尽くしたのか、我孫子時代を含めて、後年の志賀が自転車を常用した話は伝わらない（筆者が知らないだけかもしれないが）。父との確執を離れ、自由の翼を得るのは、「自転車」ではなく「小説を書くこと」に変わったのかもしれない。

▶一方、我孫子に住まいをもった杉村楚人冠も自転車に乗っていた。杉村はアメリカ公使館に勤めていた明治34（1901）年、公使館のミラーの紹介で教文館（銀座にある路面の書店としては現在唯一の書店。キリスト教に関係する書籍の出版でも知られる。当時は青山学院内に印刷所があった）のカウエン氏から購入したようだ。カウエンから杉村宛の書簡によるとカウエンが80円で購入したものを、半値の40円で譲ってもらったようだ。残念ながら車種は分からないが中古車である。それでも駆け出しサラリーマンとしては思い切った買い物だったろう。友人の三島海雲（カルピス創始者）にあてて、愛車との写真を送っているが、立ち姿が誇らしげだ。

▶杉村はエッセイ『湖畔吟』シリーズの中でたびたび自転車に触れているが、郵便局、役場、ゴルフ場などへの日常の足として使用している。大正14年の『アサヒグラフ』誌上で楚人冠の我孫子暮らしを特集し、自宅付近をパナマ帽に蝶ネクタイ姿で自転車に乗る様子が掲載されている。しかし、息子との手賀沼でのヨット、ゴルフ、コラムの執筆などと同じく、我孫子における趣味と日々の暮らしの一部としての自転車である。

▶年齢も、生まれ素性も自転車観も異なる二人であるが、志賀の自転車狂時代の最後の頃、初心者の杉村と東京のどこかで競い合ったかも知れないなあ、などと妄想するのだ。



『東京朝日新聞』
明治32年2月17日の記事



自転車に乗る杉村楚人冠

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●作家先生とは、机の前にずっと座っているか、本を読んでいるかと、勝手に想像していましたが、その想像を見事に覆すアウトドアな一面をたっぷりお伝えできたかと思います●特に志賀直哉も杉村楚人冠も当時の日本人にとって、「新しい」スポーツに挑戦していることが「彼ららしさ」なのかもしれません●この夏、多方面で熱いスポーツですが、体を動かすと気持ちがいいです。新たに発見して、共感したスポーツを始めてみるのもよいかもかもしれませんね(K)

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



スポーツといえば、志賀直哉。柳宗悦、武者小路実篤が去った後は、原田京平、瀧井孝作らと毎日のように交流したことが日記に記されている。一九二二（大正十一）年七月一日、「夕方より滝井タケイの家にてテザーボールをする」とある。テザーボールとは、志賀全集によれば「高い棒の先から網を垂らし、そこにボールを結び付け、二人が向かい合ってラケットでボールを打ち合い、柱に網を早く巻き付けた方が勝つ遊び」とある。さまざま気になることはあるが、テザーボールの映像を見てみるとお互いの気を持ち用でそのゲーム性は変わるようだ。紳士的にやるのか、攻撃的にやるのか。是非調べてみてほしい。

また、全集を紐解く中で「柔道の思ひ出」（一九五六）というものを見つけた。それによれば、柔道を始めたのは学習院中等学科一年、志賀十二歳頃。「教へて貰ふことはあまり好きでなく、同じ位の連中が集つて勝手に投げたり、投げられたり、稽古といふよりも勝負をすることの方が多かつた」という。また白樺派の有島生馬と対戦した時には「僕が押へ込んで一本とり、起き上つてみると僕の口から血が出てゐてそれが有島の胸にべつとりついてゐるぢやないか。びつくりしてあわてて柔道着の袖でそれを拭いてやつたが、今まで二人がムキになつて取組んでゐたらう。見てゐた人達はそれが大へん無邪気に見えたらしく、面白がつてゐた。僕達の間ではなんでもないことだつた」とあり、いかにも白樺派の友人同士のやりとりである。しかしながら内村鑑三への傾倒が始まる頃になると柔道その他のスポーツから離れてしまう。「あまりあわてないし、怪我なんかもしない。これなどやはり若い時に柔道をやつてゐたおかげだらうといふ気がするね。もつともこれは柔道に限らず、他のスポーツでも或は同じことなのかも知れないけれどね。」という。

同文は第一回世界柔道選手権大会が開催後のものである。「柔道もここで、「武道」と「スポーツ」との限界だけははつきりさせておくべき時期ではないかといふ気がするね。」と記している。あれから六五年。一年ずれた東京五輪開催。嘉納治五郎、志賀直哉が今生きていたらなんというのだろうか。ちなみに志賀の得意技は「巻込み」と「大内刈」だという。（稲村隆）

コラム「我孫子から」について

志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語

フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

我孫子市出身のプロゴルファー、林由郎はやしむさしさんの自伝（※）を読んだときに、はたと気づいたことがありました。なぜ杉村楚人冠は染谷そまや正治我孫子町長にゴルフ場の建設を進言したのか、その理由の一端が分かったのです。

林さんは小作農の子どもでした。普通なら小作農の家に生まれてゴルフに触れることはありませんでした。しかし、林さんが小学生の時、近所に我孫子ゴルフ倶楽部が開場します。当時のキャディーは今のような専門職ではなく、近くの子どもたちを雇ったのでした。林さんはその一人でした。給料は九ホール一五銭、林さんは勤務一日目に一八ホール二回りを務め、生涯初めて六〇銭の給料を手に入れました。さて、意気揚々と家に帰ってみると父親から「このやろう、どつから盗んできやがったんだ！」と怒られてしまいます。六〇銭といえば大人が一日の畑仕事でもらえる手間賃の額、そんな金額を子どもが稼ぐはずがないと疑われてしまったのです。ゴルフ場ができたことで一日の畑仕事に匹敵する仕事が生まれたことがこの逸話に示されています。これは平成二九年の図書館共催「楚人冠講座」の解説ネタに使いました。さて、林さんは我孫子ゴルフ倶楽部を皮切りに所属先でお客さんにかわいがられたと、何人かの逸話を書いています。

このことも大変に示唆的で、ゴルフ場ができたことで我孫子に通うようになったのがどのような客層だったのかが、ここで分かります。楚人冠がゴルフ場開設を我孫子の発展策と考えたのは、東京から質のいい客層を呼び込み、新たな雇用を生む効果を見通していたからだ、ということが林さんの自伝に凶らずも示されているのです。

自伝には楚人冠も登場します。バンカーショットができず困り果てた楚人冠に「ヨシ（林さんの愛称）、お前がやってみろ」といわれて手本を見せ、とても喜ばれた様子。我孫子ゴルフ倶楽部創設の功労者楚人冠ですが、腕前は自他ともに認める下手くそでした。しかし、楚人冠の提言がなければ、林由郎、青木功といった我孫子ゴルフ倶楽部キャディー出身の名ゴルファーは生まれませんでした。名ゴルファー誕生の裏に下手くそあり、というサゲでいかがでしょう。（高木大祐）

※ 林由郎『自由自在のゴルフ人生』講談社、2000年



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
5月15日～7月11日 ●9月26日講演会 「楚人冠の本棚」展 ●11月27日楚人冠講座											
7月13日～10月10日 10月16日～1月16日 「弱者へのまなざし」展 『「禅」が結んだ人びと」展											
7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
6月28日～8月2日 空調工事により休館											
8月3日～11月14日 「山田家コレクション」展											
11月17日～2月27日 「山田百合子と原田京平」展											
「白樺派と我孫子 2021」展											
白樺文学館											

白樺文学館臨時休館のお知らせ

6月29日(火)～8月1日(日)まで、空調設備更新工事のため、白樺文学館を休館いたします(8月28日と8月2日は月曜日による休館となります)。

8月3日より新しい展示会で皆さまをお迎えいたしますので、楽しみにお待ちください。

○パスポートの取り扱いについて

期間中、杉村楚人冠記念館は通常どおりパスポートを使用しての入館が可能です。

また、白樺文学館再開後、有効期限内にお越しいただいた場合は、有効期限を1か月間延長いたしますので、受付にてお申し付けください。

■白樺文学館

3月3日(水)～11月14日(日)

常設テーマ「白樺派と我孫子 2021」前期

近年寄贈された山田家のコレクションを中心に展示します。

前期：旧白樺文学館コレクションを中心に6月27日(日)まで

後期：山田家コレクションを中心に8月3日(水)～11月14日(日)まで

11月17日(水)～令和4年2月27日(日)

企画展「山田百合子と原田京平—我孫子への物語—」

志賀直哉の姻族山田家。志賀直哉と同世代の山田百合子と原田京平には共通点があります。歌人であったということ。実はその2人をつなぐ雑誌が今回発見されました。その雑誌は『^{しらがし}白樺』。我孫子でつながった物語をご紹介します。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料(入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによるBGM演奏を開催しています。11時～か13時～どちらか1時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は35人。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。

お知らせ

①「我孫子の風景を読む—志賀直哉たちが見た我孫子の景観—」※日程調整中 秋に開催予定

講師 小山泰弘氏(長野県林業総合センター林業専門技術員 農学博士)

②志賀直哉が我孫子を題材にして書いた短編小説『十一月三日の事』を、文化財報告「志賀直哉『十一月三日の事』を歩く」(500円)として館長の辻がまとめました。本を片手に我孫子の街を散策してみませんか?白樺文学館・杉村楚人冠記念館・教育委員会などでお買い求めいただけます。



■杉村楚人冠記念館

7月13日（火）～10月10日（日）

企画展「弱者へのまなざし —幸徳秋水・堺利彦・杉村楚人冠の交流—」

大逆事件で社会主義を恐れる権力に命を奪われた幸徳秋水、秋水亡き後の社会主義者たちを支えた堺利彦、そして彼らの理解者であり、堺が亡くなるまで折に触れて支援を惜しかなかった楚人冠。弱者に向けるまなざしを背景に、彼らの交流を描きます。幸徳の無実を伝えるため獄中から管野須賀子が出した針文字書簡、判決の日の新聞社の様子を回想する石川啄木の書簡、幸徳を監視する警察の様子を、楚人冠の記事をモチーフにして取り入れた場面がある「それから」を刊行したときの夏目漱石の書簡、貴重な資料を出し惜しみなく一気に展示します。

10月16日（土）～令和4年1月16日（日）

企画展「『禅』が結んだ人びと —釈宗演と楚人冠の周辺—」

仏教改革運動に力を入れていた若き日の楚人冠、仲間に誘われて円覚寺に参禅、管長の釈宗演に出会い、のちに仏教学者となる鈴木大拙ら新たな仲間にも出会います。その釈宗演こそ、夏目漱石『門』に登場する老師のモデルであり、出家していない一般の人の参禅を受け入れる居士禅を広め、またシカゴで万国宗教会議に参加し、海外に仏教・禅の存在を知らしめた禅僧なのです。この展示では、釈宗演を中心に、楚人冠、鈴木大拙らをつなぐ人の結びつきを見ていきます。

杉村楚人冠記念館講演会「大逆事件針文字書簡の発見」 9月26日（日） 午後2時から 生涯学習センターアビスタ ホール 講師 小林康達さん（元我孫子市史編集委員）

定員 50人（要予約 [9月1日9時受付開始]・先着順）

予約受付 杉村楚人冠記念館（電話：04-7187-1131）

年間パスポート先行予約 8月20日～31日 杉村楚人冠記念館

明治43年、大逆罪の疑いで獄中にとらわれていた社会主義者管野須賀子が、幸徳秋水の無実を伝えようと、白紙に針で文字を記し、楚人冠へ秘密裡に送った針文字書簡。我孫子市史編さんこぼやしやすみちに加わりこの書簡を発見した小林康達さんを講師に迎え、発見時の様子や、これが本物と判断できるまでの経緯など、当時を振り返りつつ、針文字書簡についてお話しいたします。

第10回楚人冠講座「楚人冠と漱石で読み比べる『禅』」

11月27日（土） 午前10時から（30分前開場） 生涯学習センターアビスタ第二学習室

定員 20人（要予約 [11月2日9時30分受付開始]・先着順）

予約受付 市民図書館アビスタ本館（電話：04-7184-1110）

年間パスポート先行予約 10月20日～30日 杉村楚人冠記念館（電話：04-7187-1131）

※先行予約期間終了後は図書館での一般受付のみとなります

小説『門』や『行人』で、登場人物の苦悩を象徴するかのような形で禅の描写を取り入れた夏目漱石。随筆「雲水行住」で、自らの実体験としてユーモラスに禅を描いた杉村楚人冠。同じ釈宗演に参禅した二人ですが作品での禅の扱いは対照的です。友人同士でもあった二人の作品を読んで、禅体験をどういうふうにとらえていたのか比べてみましょう。

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。





我孫子通信

文人の郷だより

令和3年秋号

通信第五



辻説法 館長のつぶやき



第7回 志賀直哉の聴いた「音楽」

▶志賀は大正12（1923）年3月2日に、およそ8年住んだ我孫子を離れ、3月8日には京都に一家を挙げての移住した。同年5月2日の日記には

「我孫子生活では無^ぶりょうと戦う為のエネルギーを甚だしくついやした事を想う、京都へ来て仕事出来そう、善悪共に刺激ある方よし、もっともっと生き生きとして仕事せねばならぬ」

と書き記している。志賀にとって我孫子は無聊すなわち「つまらない、刺激が少ない」場所であり、それと戦うためのエネルギーが必要だった、と言うのだ。志賀がどのように無聊と戦ったのか？については、近々我孫子市教育委員会から刊行される『志賀直哉「雪の日」「雪の遠足」を歩く』をお読みになって下さい（宣伝）。

▶さて、とにもかくにも「善悪共に刺激のある」京都に移り住んだ志賀は、どのような毎日を送っていたのだろうか。大正12年4月の日記を抜いてみると、

- 4月17日～東本願寺、三十三間堂、大徳寺を廻る
- 4月19日～都おどりを見る
- 4月21日～武者小路実篤らと京極で活動写真を見る
- 4月27日～奈良の博物館で絵を見る
- 4月28日～妻 康子と高島屋へ。新京極で活動写真「自活する女」「My Boy」を観る

など、堰を切ったように友人や家族で寺社巡り、芝居見物、活動写真などにいそしんでいる。我孫子にはアミューズメントスポットは無かったものなあ。

▶そんな中、5月14日と15日の日記に気になる記述を見つけた。

14日 「七時頃帰り直ぐ公会堂にクライスラーをききに行く」 15日 「夜クライスラーを聞く」

とある。公会堂とは現在の京都市京セラ美術館の地に建てていた、京都市公会堂(岡崎公会堂)のことである。大正6(1917)年に建てられた、檜皮葺の堂々たる屋根と唐破風を構えた和風建物である。そこで演じられた2日間のクライスラーのコンサートに志賀は通ったのだ。そこまで志賀を惹きつけたクライスラーとはいったい何者だろうか。



岡崎公会堂 (写真絵葉書)

▶フリッツ・クライスラー (Fritz Kreisler, 1875～1962) は

ウィーン生まれのヴァイオリニストであり作曲家。12歳でパリ高等音楽院を首席卒業し、イギリス、アメリカでも活躍した。代表的な作品としては、「愛の喜び」、「愛の悲しみ」（筆者はこの曲が心にしみる）などがある。

▶クライスラーは大正12（1923）年、日本コンサートツアーを実施した。5月1日から5日の東京の帝国劇場を皮切りに、神戸、大阪、名古屋、京都、東京と横浜と、20日間で17回の演奏会という殺人的スケジュールをこなしたようだ。演奏地では名士や芸術家から朝まで歓待を受けたというから凄まじい。『京都音楽史』という本には、志賀が聴いた5月14日、15日の演奏会の演目が記録されている。14日の演目を記すと、

- 一、クロイツェル ソナタ 作品四十七…ベートーヴェン
- 二、コンチェルト ホ短調 作品六十七…メンデルスゾーン
- 三、イ、ロンド ト長調…モーツァルト
- ロ、ワルツ…ブラームス—ホッチスタイン
- ハ、ユーモレスク…ドボルジャック—クライスラー
- ニ、カプリス・ヴェノア…クライスラー
- ホ、タンボリン・シノア…クライスラー

『京都音楽史』には当日の様子として「黒ビロードを背景に薄暗い光りの下にクライスラー氏は伴奏者と共に潮のような拍手に迎えられて其の姿を現した（中略）二時間に亙る演奏には幾度か嵐の如きアンコールが繰り返され千の聴衆は其の神技に魅了された」と伝えている。志賀もクライスラーのヴァイオリン超絶技巧に魅入られ、熱狂の渦に取り込まれたのだろう…

▶日本を離れたクライスラーはベルリンを拠点とするが、ユダヤ系の彼はナチスに圧迫を受ける。1938年にはパリ、さらにアメリカ移住を余儀なくされた。戦後は交通事故による影響から満足な演奏ができず1950年に引退している。クライスラーは、演奏家として最も恵まれた、良い時代に日本を訪れた。その演奏を聴けた志賀は、京都で「刺激のある」体験をしたのだ。

▶しかし、小説という意味では、志賀は「無聊な」我孫子で彼の代表作を書き連ねたが、京都では『雨蛙』『山科の記憶』などの短編しか書くことができなかった。

▶無聊な筆者が言うのはおこがましいが、クライスラーと志賀の芸術家としての人生が、京都で奇妙な重なりを示したとは言えないだろうか。

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●食欲の秋！楚人冠の日記を読んだとき、パンとコーヒー、（今も）高級品のカルピスバター！！なんて優雅な朝食なんでしょう！ぜひ、ご紹介したいと思い、このテーマにしましたが、背景には社会的な問題が隠され、自分の考えは浅はかでした●現代は生活様式も多様化し、食事方法も食材も自由なもの、対してフードロスが新たな問題となっています●朝食は1日の始まり、充実した日を過ごすためにも自分にも自然にも優しいものにしたいですね。（K）

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



「私は前から、小説家は衣食住に興味のある方がいいといふ考へを持つてゐる。それはその人の作品に一種の色彩となつて現はれるからである。」志賀直哉「衣食住」(一九五五)の冒頭である。

山田裕氏(志賀直哉御令孫)によると小さい頃一緒に生活をしていた時、朝食は洋食で、トーストにオートミールなどを食べていたという。また次の様にも記している。

「食」に就いて、男は食ひものの事をかれこれいふものではないとよくいふ。うまいか不味いか自分でわからなければそれでもいいが、分るなら我慢して黙つてゐるのが何故いいのだらう。毎日三度、一生の事だから、少しでもうまくして、自分だけでなく家中の者までが喜ぶやるにしてやるのが本統だと思ふ。私が一番不愉快に思ふのは一寸気をつければうまくなる材料を不親切に骨惜みから不味いものにして出される時である。」

食へのこだわりこそが志賀文学の緻密な文章につながるものなのだろうか。

一方武者小路実篤は、食へのこだわりは薄かったという。武者小路の三女、辰子の『ほくろの呼鈴父実篤回想』(一九八三)「食べ物」によれば、「こつた料理も好きでなく、「なんだか変なもの」と言うのだった。「志賀が好きだそうだ」というと、それはとてもすてきな、おいしい上品なもので、父は苦手なものだった」と記している。また朝食については、「父は朝におみおつけをのむという習慣はなかったようだ。」とある。ただ果物は大好きだったようで、「梨、柿、栗など、自分で皮をむいて食べるを楽しんだ」という。そのように考えていくと武者小路が残した画賛(書と野菜や果物の絵を描いたもの)の味わいがまた深くなるような気がする。新しき村をはじめとして武者小路は、自分自身の理想のために素直に生きたのだからという想いがわいてくる。気の赴くままに筆を走らせ詩を書いたのだからと。

ちなみに私は志賀派である。最近の朝食はリンゴをミキサーにかけ、水とヨーグルトを混ぜて飲んでた。朝食である。しかし調子を落とすとたちまちこだわりを失う。まだまだ志賀の境地には程遠いようだ。(稲村 隆)



志賀直哉用紙

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語

フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

杉村楚人冠の昭和一八（一九四三）年の日記を繰ってみると、「朝食コーヒ、トースト」などの記述がそれなりの頻度
で出てきます。これだけ見ると当時としては随分ハイカラな、という気がしてきますが、それだけで済ませるわけには
かない事情があったように思います。というのは、わずか三年前、昭和一五年の日記にはほとんどこういう朝食の記述は
見当たらないからです。それが昭和一六年八月には蘭夫人の実家の旅館に滞在中に知人と「トーストの作り方を語り合ふ」
という記述があり、なんとかパンをおいしく食べようと工夫している様子がかげえますから、このあたりから試行錯誤
が始まったようです。この間に一体何があったのでしょうか？

おそらく転機は昭和一六年です。四月に米穀の配給制度が六大都市で実施されています。『我孫子市史』には米の配給
について記述がないので、我孫子での実施時期は不明ですが、遠からず影響は波及してきたでしょう。米が制限された中
で、なるべくおいしい朝食をとろうという努力の結果がトーストだったのかもしれない。それでも楚人冠は恵まれてい
た方です。昭和一八年には新聞社に本社したときパンを受けとってくる記述がたびたび見られます。新聞社の購買部のよ
うなところでパンが購入できたのでしょう。時には、友人の三島海雲がバターやクリームを送ってくれることも。三島は
カルピスの社長です。カルピスは軍需品に指定されていたので、戦時中も生産され続けていました。その製造工程で残る
乳脂肪から作った加工品を融通してくれたのです。バターは現在、カルピスバターとして商品化されています。

会社や友人のおかげで、戦時中でもなんとかおいしい朝食を用意していた楚人冠。しかし、パンも配給になったためか、
やがて「トースト」の記述は消え、昭和一九年の朝食には「麦粉」が登場、ついには「芋粥」や「雑炊」が増えていきま
す。米が少ない時代や地域によく見られた、混ぜ物と水分でかさを増して、満腹感を得る工夫です。戦後の混乱続く昭和二〇
年一〇月に亡くなった楚人冠にとって、トーストの朝食は生涯最後のぜいたくだったのかもしれませんが。（高木 大祐）



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
10月16日~1月16日 『『禪』が結んだ人びと』展			11月27日 楚人冠講座			1月18日~3月13日 「てがみ」展 楚人冠の 随筆に 登場する人びと			3月15日~5月15日 「楚人冠がみた舞台芸術 —オペラ・演劇・舞踊」展		
10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
8月3日~11月14日 「山田家 コレクション」展			●12月4日散策イベント			3月1日~9月25日 常設テーマ「民藝運動と我孫子」展			11月17日~2月27日 「山田百合子と原田京平」展		
白樺文学館											

■白樺文学館

11月17日（水）～令和4年2月27日（日）

企画展「山田百合子と原田京平—我孫子への物語—」展

志賀直哉の姻族山田家。志賀直哉と同世代の山田百合子と原田京平には共通点があります。歌人であったということ。実はその2人をつなぐ雑誌が今回発見されました。その雑誌は『白檮^{しらがし}』。我孫子でつながった物語をご紹介します。

3月1日（火）～9月25日（日）

常設テーマ「民藝運動と我孫子」展

白樺文学館のコレクションの中から民藝運動と我孫子をテーマに展示を行います。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料 (入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによる BGM 演奏を開催しています。11時～か 13時～どちらか 1 時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は 35 人。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧くださいいただけます。

散策イベント「楽藝人とぶらた森ツアー」

参加費:無料 (要予約)

12月4日（土）13時30分開始 志賀直哉邸跡

講師 小山泰弘氏（長野県林業総合センター林業専門技術員 農学博士）

定員 20人（要予約 [11月16日9時30分受付開始]・先着順）（雨天中止）

年間パスポート先行予約 11月1日～15日

志賀直哉たちが見た我孫子の風景を解説と散策でお楽しみいただけます。



■杉村楚人冠記念館

10月16日（土）～令和4年1月16日（日）

企画展「『禪』が結んだ人びと ― 釈宗演と楚人冠の周辺 ―

仏教改革運動に力を入れていた若き日の楚人冠、仲間に誘われて円覚寺に参禅、管長の釈宗演に出会い、のちに仏教学者となる鈴木大拙ら新たな仲間にも出会います。その釈宗演こそ、夏目漱石『門』に登場する老師のモデルであり、出家していない一般の人の参禅を受け入れる居士禅を広め、またシカゴで万国宗教会議に参加し、海外に仏教・禅の存在を知らしめた禅僧なのです。この展示では、釈宗演を中心に、楚人冠、鈴木大拙らをつなぐ人の結びつきを見ていきます。

令和4年1月18日（火）～3月13日（日）

テーマ展示「てがみ展 楚人冠の随筆に登場する人びと」

身近なところに起きた出来事を、皮肉の効いたテンポのよい文章で書く随筆を得意とした杉村楚人冠。その作品には楚人冠の身近にいた様々な友人たちが登場します。楚人冠が彼らについて書いた随筆の一節とともに、そのてがみを紹介。SF作家星新一の父である星一やジャーナリスト仲間の長谷川如是閑などのてがみを展示します。変わり種は小説家江見水蔭と演芸評論家水谷幻花の喧嘩を楚人冠や童話作家巖谷小波が仲裁して仲直りさせた一件に関するてがみ。楚人冠の周りにいた魅力的な人びとの存在を知ってください。

令和4年3月15日（火）～5月15日（日）

企画展「楚人冠がみた舞台芸術 ― オペラ・演劇・舞踊」

杉村楚人冠には舞台芸術とも縁の深い新聞記者でした。女性の新しい職業への偏見に屈することなく活躍の場を広げていった女優森律子やオペラ歌手三浦環・原信子、一時は芸者として身を立てながら舞踊の道を進み家元と対立するや自ら一派を興し活躍した藤蔭静枝、杉村楚人冠の小説『うるさき人々』の舞台化に関わった帝劇支配人山本久三郎や新国劇の沢田正二郎、五郎劇の曾我廼家五郎。楚人冠が関わった舞台芸術関係者を紹介します。そして最後に、一時はロンドンで演劇を勉強しようと志しながら、夢叶わず表舞台に立つことのなかった、ある女性の手紙にこめられた痛切な思いを……。

第10回楚人冠講座「楚人冠と漱石で読み比べる『禪』」

参加費：無料

11月27日（土） 午前10時から（30分前開場）生涯学習センターアビスタ第二学習室

定員 20人（要予約 [11月2日9時30分受付開始]・先着順）

予約受付 市民図書館アビスタ本館（電話：04-7184-1110）

年間パスポート先行予約 10月20日～30日 杉村楚人冠記念館（電話：04-7187-1131）

※先行予約期間終了後は図書館での一般受付のみとなります

小説『門』や『行人』で、登場人物の苦悩を象徴するかのような形で禅の描写を取り入れた夏目漱石。随筆「雲水行住」で、自らの実体験としてユーモラスに禅を描いた杉村楚人冠。同じ釈宗演に参禅した二人ですが作品での禅の扱いは対照的です。友人同士でもあった二人の作品を読んで、禅体験をどういうふうにとらえていたのか比べてみましょう。

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。



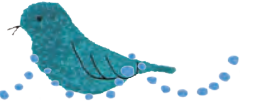


我孫子通信

文人の郷だより

令和3年度冬号

通信第六



No. _____
Date _____

辻説法

館長のつぶやき



第8回 志賀直哉と杉村楚人冠の「書斎」

▶志賀直哉の書斎を直すことにした。この書斎は志賀たちが住んだ母屋とは別棟の「離れ書斎」で、101年前の大正10（1921）年に作られた。南側の雨戸と障子を開けると畳敷きの六畳間に一畳の押し入れ、北側には半畳ほどの床の間、引き戸裏には廁が備わる簡素にしてミニマムな空間だ。網代仕立ての船底天井、部材には敢えて虫食い痕のある木や皮付き木を使うなど、こだわりのある数寄屋造りの茶室のようである。時が経ち、志賀の手を離れた書斎は近隣の住宅に移築され、茶室として使用されていたようである。昭和62年、所有者の手を離れ、公園となっていた志賀直哉邸跡（緑雁明緑地）の元の場所に再移築され、今に至った。

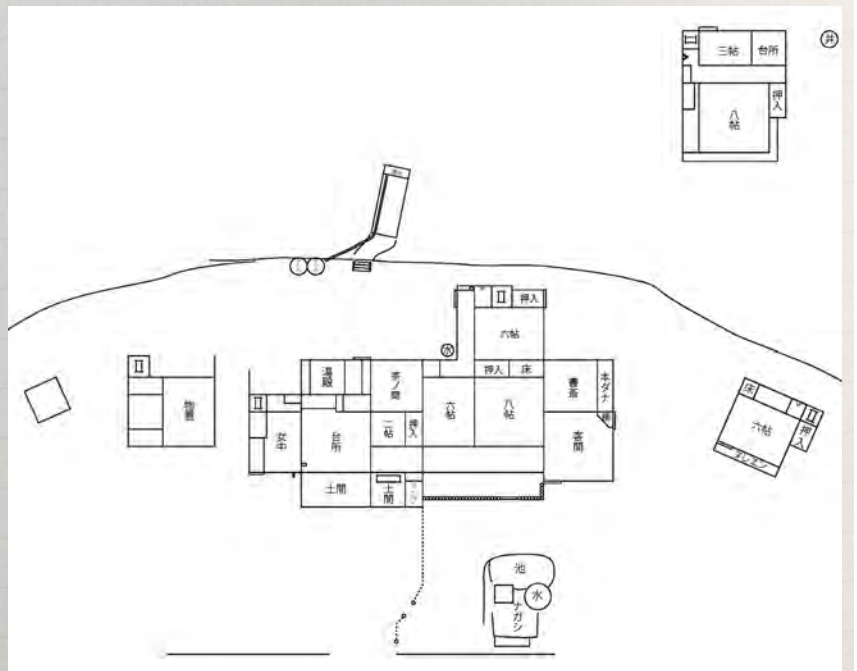
▶志賀直哉が大正4（1915）年、我孫子に建てた家は、もともとあった農家住宅を購入し三間建て増したものだという。白樺文学館蔵の志賀直哉直筆の邸宅見取り図を見ると、建て増したのは西側の女中部屋、東側の客間と書斎の部分であろう。客間は沼を足下に望む見晴らしの良い南側、書斎は日当たりの悪い北の崖側に配置されている。

▶暗かったのでは？と思われるかもしれないが、志賀はその理由を「私の書斎」にこう書いている。

「明る過ぎると、気が散るので、机の上だけ



現在の志賀直哉邸跡書斎の様子



志賀邸の間取図

明るく、ほかは薄暗いというような窓の小さい部屋が好きで、我孫子でも奈良でもそういう書斎を作った」なるほど、母屋の北側に書斎が置かれたわけだ。また「離れ書斎」の南向きの戸は日光を取り込むガラス戸ではなく、障子にした理由も分かる。障子越しの、ほの明るい光の下で落ち着いて執筆できたのだろう。

▶母屋の書斎では「小僧の神様」「城の崎にて」、「離れ書斎」では長編小説「暗夜行路」が執筆された。現在では宅地造成のため手賀沼を望むことはできないが、執筆に疲れた志賀が障子を開ければ、遠くに手賀沼を望むことができた。はじめてにして唯一の長編小説に取り組むためにも、離れ書斎は必要な環境であったのかもしれない。

▶一方、杉村楚人冠は大正12（1923）年の関東大震災をきっかけに、翌13年我孫子に本格的な住まい（現在の杉村楚人冠記念館 母屋）を設けて東京大森から移住してきた。杉村はエッセイ集「湖畔吟」で「ライト式の猿真似」と言うが、アメリカ帰りの建築家 下田菊太郎が設計した和洋折衷式の文化住宅である。ここには玄関脇の南側に「サロン」と呼ばれる書斎兼応接間が設けられた。書棚には和洋書がギッシリと配架され、杉村の博覧強記ぶりがうかがえる。

▶杉村は東京朝日新聞社に会社することもあったが、自宅で執筆することも多かった。そのため落ち着いた書斎が欲しかったのか、翌大正14（1925）年に母屋に接続する二階建て部分を増築し、その一階を書斎として使用した。ここでコラムの原稿を書き、時には伝書鳩を使って原稿を東京朝日新聞社に送ることもあったらしい。

▶サロンの書斎がややもすると厳めしい印象を受けるのに対し、増築された書斎に入ってみると、上げ下げ窓から日が差し込み、白い漆喰壁に反射して柔らかな明るさを保つ。健康的と言っても良い。この書斎の窓からは手賀沼を見ることはできず、母屋の煙突と、季節によって咲き乱れる椿の花を眺めることぐらいしかできないが、不思議と穏やかな気持ちになる。皮肉屋で知られる杉村であるが、「湖畔吟」にある、我孫子での純朴な人々との出会い、掛け合いは、きっとここで書かれたのでは？と想像を膨らませる。

▶是非、志賀と杉村の本を片手に、二つの書斎に足を運んでいただきたい。そして彼らの創造を追体験していただきたいと心から思う。



写真上は、杉村楚人冠記念サロン、当初は書斎として設計されたが、すぐ手狭になり、翌年には増築して書斎ができた

コラム「辻説法」について

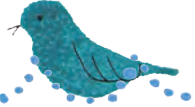
辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●雪の日にココアを飲むのが好きなので、冬号のテーマは「ほっこり」にしました。寒い日が続きますが、各館学芸員の文章から、少しでもお気持ちが和らいでいただければと思います●杉村楚人冠『湖畔吟』の現代語版が完成しました。楚人冠の描く我孫子の人びととの交流を想像しながら読み進めると心が温まります●志賀の小説からもゆっくりとした我孫子の情景を伺うことができます。我孫子はいまもむかしもゆったりとした時間が流れています（K）

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



二〇二二年、令和も早四年目を迎えた。年明け早々関東地方も珍しく積もるほどの雪となり、志賀直哉の次の文章を思い出した。

「子供の頃から雪は好きだった。大人が雪がふり出すと、よく「悪いものがふり出しました」というのが不服だった。雪ふりことに大雪の日には家にじっとしていられず、必ず、出かけないではいらなかった。」

志賀直哉「雪のおもいで」（一九六七）の冒頭である。八四歳となる志賀が振り返る「雪のおもいで」は、『白樺』創刊の頃に、学習院の先生であった神田乃武の別荘に郡虎彦を武者小路実篤とともに訪ねる様子が描かれている。郡を訪ねて行くも、不在のため二人で庭の雪景色を眺めることにすると、神田がやってくる。雪の重みで松が折れないかを心配してやってきたのである。志賀たちも雪落としを手伝い、終わると神田は別荘番に食事の支度をさせる。志賀たちにはかけそばを、神田には釜揚げうどんと酒が用意された。ここからがこの話の面白いところである。

「武者も私も全然酒は飲めなかった。出されたかけそばはすぐ平らげた。神田さんはそれを見ると、自分の食いかけた釜揚げうどんをこちらに押しよこし、「さめないうちに」といった。残り物を食った経験のない私たちはちよつと変な気もしたが、神田さんの気持が大変自然で、こちらも素直にそれをたちまち食ってしまった。」
志賀たちのお育ちが良すぎる態度こそ白樺ファンには「ほっこり」するシーンではないだろうか。神田の長男が志賀と同級生であったことから、子どものおもったのではないだろうか。志賀は綴っている。

「ほっこり」というお題をもらった時に、どういう意味なのか改めて調べてみた。方言としての意味は「疲れた」「退屈だ」などどうやらあまりいい意味ではないようだ。もし志賀にこのネタで書いてくれと依頼があったとしたら、絶対に方言としての意味から文章を書くに違いない。時代とともに変わりゆく言葉の意味を考えると「ほっこり」する自分がある。（言葉は善悪両方の意味を知り皮肉的に使ってこそ面白いと常々思っている）（稲村 隆）



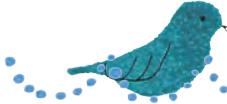
コラム「我孫子から」について

志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

「ほっこり」なんてテーマでそうそう長い文章が書けるものではありません。今回は一つ、杉村楚人冠のエッセイから題材を取りつつ、楚人冠が時に書いていた小品のスタイルをまねてやってみましょう。

楚人冠が大森に引越して間もない頃、友人が訪ねてくれましたが、当時は住宅も店も少なかった大森ではもてなす方法もなく、落ち葉を集めて芋を焼きました。「落ち葉かいて君と小諸を焼かんかな」(『へちまのかは』「病間瑣言」)

ある日、宿直で新聞社に泊まった楚人冠。深夜二時に酒が欲しくなりましたが、給仕はもう寝ている時間、小間使いを探してもいません。仕方なく大通りに出ているおでん屋に行くのと、そこにいた先客はなんと小間使い。「これは先生でござりまするか、えらいところを見つけれました」(『へちまのかは』「宿直日記」)

楚人冠が四歳の長女にお菓子をあげたときの会話。「旨いか?」「うまい」「まずいか」「まずい」「どっち?」「あっち」。やたらと自殺や強盗のニュースがきて忙しかった宿直の日、社会部の夜番の編集長ついに堪えかねて「強盗したなら強盗したと、した奴が自身で新聞社に書きにくればいいじゃないか」(『へちまのかは』「続大森閑語」)

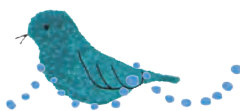
イギリス特派中、今というゲストハウスに滞在していた楚人冠。漢字に興味を示す同宿のイギリス人たちに「女」が三つで「姦しい」だと説明すると、男性陣は拍手喝采、女性陣は納得いかない様子。そこで誰かが、では「男」が三つでなんだ、というところある婦人「煙草をくすべてうるさい」(『大英遊記』「ロンドンの下宿」)

あわてた様子で上野駅にやってきた若い女性。日傘をさしたまま切符を買い、改札を通り、ホームに上がり、電車に乗ろうとしたところでようやく日傘に気づき、急ぎたんで乗り込みました。(『湖畔吟』「パラソール」)

常磐線でよく乗り合わせた楚人冠と嘉納治五郎。嘉納はコートを着るのが下手で、よくまごついていたとか。そんなとき楚人冠が着せてあげると恐縮したような顔つきでお礼を言ったそう。(『楚人冠全集』第十六巻「嘉納先生」)(高木 大祐)



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
1月18日~3月13日 「てがみ」展 楚人冠の 随筆に 登場する人びと ●3月21日お茶会イベント 3月15日~5月15日 「楚人冠がみた舞台芸術 —オペラ・演劇・舞踊」展											
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
11月17日~ 2月27日 「山田百合子と 原田京平」展 3月1日~9月25日 常設テーマ「民藝運動と我孫子」展											
白樺文学館											

■白樺文学館

11月17日（水）～令和4年2月27日（日）

企画展「山田百合子と原田京平—我孫子への物語—」展

志賀直哉の姻族山田家。志賀直哉と同世代の山田百合子と原田京平には共通点があります。歌人であったということ。実はその2人をつなぐ雑誌が今回発見されました。その雑誌は『白樺』。我孫子でつながった物語をご紹介します。

3月1日（火）～9月25日（日）

常設テーマ「民藝運動と我孫子」展

白樺文学館のコレクションの中から民藝運動と我孫子をテーマに展示を行います。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料 (入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによる BGM 演奏を開催しています。11時～か 13時～どちらか 1 時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は 35 人。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。

志賀直哉邸跡書斎修復のためのクラウドファンディングが終了しました！

ご協力いただき、ありがとうございました

令和4年1月5日（水）に無事、クラウドファンディングが終了しました。当初の目標は 757,000 円だったところ、目標を大きく超える 1,288,000 円、合計 186 人の方々からご寄附をいただきました。多くの皆様のご厚意に心より感謝申し上げます。

志賀直哉邸跡書斎の修復も終了し、書斎の開放日も増やしました。白樺文学館へお越しの際は、ぜひ、お立ち寄りください。

【開放日】白樺文学館開館日の午前 10 時～午後 2 時まで



■杉村楚人冠記念館

令和4年1月18日（火）～3月13日（日）

テーマ展示「てがみ展 楚人冠の随筆に登場する人びと」

身近なところに起きた出来事を、皮肉の効いたテンポのよい文章で書く随筆を得意とした杉村楚人冠。その作品には楚人冠の身近にいた様々な友人たちが登場します。楚人冠が彼らについて書いた随筆の一節とともに、そのてがみを紹介。SF作家星新一の父である星一やジャーナリスト仲間の長谷川如是閑などのてがみを展示します。変わり種は小説家江見水蔭と演芸評論家水谷幻花の喧嘩を楚人冠や童話作家巖谷小波が仲裁して仲直りさせた一件に関するてがみ。楚人冠の周りにいた魅力的な人びとの存在を知ってください。

令和4年3月15日（火）～5月15日（日）

企画展「楚人冠がみた舞台芸術 —オペラ・演劇・舞踊」

杉村楚人冠には舞台芸術とも縁の深い新聞記者でした。女性の新しい職業への偏見に屈することなく活躍の場を広げていった女優森律子やオペラ歌手三浦環・原信子、一時は芸者として身を立てながら舞踊の道を進み家元と対立するや自ら一派を興し活躍した藤蔭静枝、杉村楚人冠の小説『うるさき人々』の舞台化に関わった帝劇支配人山本久三郎や新国劇の沢田正二郎、五郎劇の曾我廼家五郎。楚人冠が関わった舞台芸術関係者を紹介します。そして最後に、一時はロンドンで演劇を勉強しようと志しながら、夢叶わず表舞台に立つことのなかった、ある女性の手紙にこめられた痛切な思いを……。

清接庵茶会

参加費：100円

3月21日（月・祝） 席主：県立我孫子高等学校茶道部

時間 ① 10時～、② 11時～、③ 13時～、④ 14時～

定員 各回 10人（要予約 [3月3日9時受付開始]・先着順）

予約受付 杉村楚人冠記念館（電話：04-7187-1131）

年間パスポート先行予約 2月20日～28日

離れの茶室「清接庵」を会場とした茶会です。席主を務めるのは地元我孫子高校茶道部の生徒たち。また、待合の時間には学芸員による展示解説付き。杉村楚人冠邸園がもっとも彩りを増すツバキの季節に、花と、展示と、お茶をお楽しみください。

ご注意 飲食を伴うイベントですので、新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、ご予約受付後でも中止の可能性があります。

■文化・スポーツ課

我孫子市文化財報告第19集『志賀直哉「雪の日」・「雪の遠足」を歩く』（500円）発売中！

お買い求めは、白樺文学館・杉村楚人冠記念館・教育委員会へどうぞ！

我孫子市文化財報告第19集『志賀直哉「雪の日」・「雪の遠足」を歩く』を出版しました。『志賀直哉「十一月三日午後の事」を歩く』（500円）とともに志賀が見た我孫子の様子を分析しています。散策のお供にいかがでしょうか？

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。

